

GSID

Newsletter

No.38
2017.6.1



発行

名古屋大学大学院 国際開発研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

tel/052-789-4953 fax/052-789-2666

http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp

「国際開発研究科の25年と今後」

研究科長 伊東 早苗

1991年に創設された国際開発研究科(GSID)は、昨年25周年を迎えました。記念の国際シンポジウム「新時代の国際開発研究と教育:持続可能な開発目標とその先」では、国内外のゲストをお招きし、これまでの歩みと今後の展望について幅広く多様な観点から意見交換が行なわれました(くわしくは次頁で報告されます)。この中で、国際開発研究科の歩みを象徴的に示していたのが、二つのラウンドテーブルセッションです。世界各地で活躍する修了生が登壇し、これまで研究科が培ってきたネットワークをアピールする格好の機会になったのではないかと思います。

過去25年で修了生輩出の実績をあげてきた一方、それを踏まえての改革の時期に現在研究科は直面しています。これまで研究科の3専攻の一つだった国際コミュニケーション専攻が2017年4月から人文学研究科に移行し、現在国際開発専攻と国際協力専攻の2専攻体制になっています。今後もさらに組織改編が進められ、来年度は組織体制とカリキュラムを一新した研究科に生まれ変わる予定です。これを機に、GSIDの25年間を簡単に振り返ってみたいと思います。

1990年代は、国際開発専攻、国際協力専攻、国際コミュニケーション専攻前期課程が年を追って順に開設され、それぞれの専攻の後期課程も同様に設置されていくという、まさに拡充の時期でした。組織体制が落ち着いた後は、次の制度改革と整備の時期を迎えます。2006年に新教育カリキュラムを導入、「T字型教育」をコンセプトとする基礎と専門の組み合わせを理念化しました。また2009年には『国際開発学入門』(勁草書房)を出版、テキストとしての体系化を行なったことが評価され、国際開発学会からは特別賞を授与されました。さらに、設立当初から文部科学省や国際協力機構、アジア開発銀行の奨学金など様々な枠組みを通して留学生を積極的に受け入れてきたこともあり、年々留学生の比率は上昇、名古屋大学の中

でもいち早く国際化に貢献してきました。その蓄積が上述の修了生の輩出という結果につながっています。

GSIDの歩みは、日本の国内外の事情とも大きく関連しています。GSIDが創設された1990年代は、日本の政府開発援助(ODA)の額が世界一になるなど、日本における途上国への支援の機運が高まっていた時期でもありました。しかしながら、その後日本のODAの額は低下、世界一の座を明け渡しました。また日本経済の低迷や、国立大学の法人化後の厳しい財政事情の中で、人文社会系の学問を取り巻く環境が悪化しているという実感は、多くの関係者が共有していることでしょう。その中で、現実社会の変化する課題を見据えて既存の学問分野の壁を乗り越え、新たな知見を生み出すことを通じてより良い世界の構築に貢献する国際開発学の重要性は、実はこれまで以上に高まっているのです。

国際社会では、2000年から2015年にかけての目標であった「ミレニアム開発目標」が昨年より「持続可能な開発目標」へと置き換えられました。特徴として、途上国と先進国の垣根を超えた共通課題に取り組むことが一つの重要なポイントとしてあげられます。また新興国の台頭、環境破壊、テロへの対応等、グローバル化にともなう途上国と先進国の双方を巻き込む国際情勢は刻々と変化しています。GSIDの組織改編は、国際社会におけるこの開発課題や情勢の変化とも密接に連動しています。変化の激しい国際開発の動向に対応するために、研究科もまた変えるべきところは変えて新たな一步を踏み出すタイミングを迎えています。来年のこの時期には、組織改編が無事終了して、その概要をご報告できるよう作業を進めていきたいと考えています。



TOPICS

国際開発研究科創立25周年記念行事

講師 カンピラパーブ スネート

国際開発研究科(GSID)が創設されて25年を迎え、記念行事を実施しました。2016年7月28日(木)に、松尾清一名古屋大学総長とGSID修了生との特別座談会「NU MIRAI 2020の実現に向けて一同窓生からの視点」を開催しました。名古屋大学が2020年までに達成すべき目標を定めた「NU MIRAI 2020」が掲げる教育と国際化のあり方について、世界で活躍する研究科同窓生6名を招き、総長と意見交換をしました。同窓生6名は、それぞれの立場から、名古屋大学が世界で活躍する人材を育成するために有効な教育プログラムや、国際化推進のための修了生ネットワークの活用方法等について、熱く語り合いました。特別座談会の様子は、YouTubeに公開しており、「NU MIRAI 2020」キーワード検索により閲覧可能です。

続いて、翌日29日(金)に、「新時代の国際開発研究と教育—持続可能な開発目標とその先」と題する研究科創立25周年記念国際シンポジウムを、野依記念学術交流館において開催しました。松尾総長が、名古屋大学を代表して歓迎の辞を述べた後、来賓として、前川喜平文部科学省事務次官、竹若敬三外務省国際協力局審議官、高瀬千賀子国連地域開発センター(UNCRD)所長および加藤正明国際協力機構(JICA)上級審議役が、研究科25周年を祝福するあいさつを行いました。基調講演に先立ち、伊東早苗研究科長より、「国際開発研究科25年の歩みと国際開発の新たな潮流」と題する報告が行われました。基調講演では、ヨーロッパ最大の国際開発学拠点である英国マンチェスター大学グローバル開発研究所長であり、英国開発研究会会長でもあるデビッド・ヒューム教授が登壇しました。ヒューム教授は、国際社会が掲げる開発目標が「ミレニアム開発目標(MDGs)」から「持続可能な開発目標(SDGs)」に移行したことが、グローバルガバナンスの変化にどう連動しているのかについて講演を行いました。その後、17のSDGsのうち、二つの目標(「包含的な経済成長の促進」および「平和で包含的な社会の促進」)について、世界で活躍する同窓生10名がラウンドテーブル・ディスカッションを行い、目標達成のために何が必要かを議論しました。さらに、目標達成に向けてどのような研究を推進すべきであり、それをどう国際開発分野の大学院教育に反映すべきかについて、会場を含めた活発な討論が交わされました。

記念国際シンポジウムには、38か国から約250名の参加があり、その様子はウズベキスタン、カンボジア、タイ、インドネシア、フィリピンにライブ映像配信されました。国際社会が取り組む開発目標達成にむけて、本研究科が研究と教育を通じて貢献するという強いメッセージを、国内外に発信する最良の機会となりま

した。

国際シンポジウム後に懇親会が開催され、海外から招聘した同窓生10名がGSID親善大使に任命されました。親善大使として、国際開発研究科のグローバルなネットワーク強化に引き続き貢献していくことを誓いました。名を連ねたのは、①ンブリ チャールズ ポリコ博士(1996年修了、国連食料農業機関(FAO)駐日連絡事務所長)、②リザル アファンディ ルクマン博士(2000年修了、インドネシア経済調整担当副大臣)、③チェ チーリー博士(2002年修了、カンボジア王立プノンペン大学長)、④アセール ハビエール博士(2002年修了、フィリピン大学ロスバニョス校公共政策学部准教授)、⑤トルクンベック アブディグロフ氏(2005年修了、キルギス中央銀行総裁)、⑥ファルカンダ シャミム博士(2007年修了、バーレーン大学経営学部経済・財政学科准教授)、⑦イサム ヤシン モハメド博士(2010年修了、国際環境開発研究所上級エコノミスト)、⑧エリック オッセイ-アシベイ博士(2011年修了、ガーナ大学経済学部上級講師)、⑨潘 暁明博士(2012年修了、上海国際問題研究所主任研究員)、および⑩カイルラー ホーマム氏(2015年修了、アフガニスタン財務省国家政策統括官)、の10名です。1991年の設立以来、合計1,975名を数える研究科同窓生が、世界中で活躍していますが、彼らが本研究科の貴重な資産であることを再認識する機会となりました。

▶ GSID親善大使任命式での記念撮影



◀ 松尾総長との特別座談会の様子



▲ 国際シンポジウムでの来賓、基調講演者、パネリストによる記念撮影

海外実地研修 2016

海外実地研修 —フィリピン・ラグナ州リサル市にて—

海外実地研修実施委員会 委員長 岡田 勇

海外実地研修(Overseas Fieldwork, OFW)は、国際開発・国際協力の分野における人材育成を目的とし、主に修士課程1年生を対象として、1992年より毎年実施されてきました。2016年度は、フィリピンはラグナ州リサル市で9月18日から10月2日に実施されました。フィリピンでの実施は、2015年に続き6回目です。

2016年は、カウンターパートであるフィリピン大学ロスバニョス校(UPLB)公共政策大学院の協力をえて、ラグナ州でも最も貧しい地方自治体の1つでありながら、市長のリーダーシップの下で観光業の創生がみられるリサル市を選び、「コミュニティ開発における機会の創造」という主テーマを設定しました。2016年1月の予備調査でリサル市市長から受けた説明にもとづいて、「食料安全保障」、「地方政府の役割」、「外国語教育」、および「若者の雇用」といったテーマを設定し、志望学生のうち21名を選出して、上記のテーマに基づいて4つのグループに分けました。最終的には学生20名(日本人学生10名、留学生10名(タイ2名、インドネシア2名、中国1名、ネパール1名、カメルーン1名、セيشェル1名、ガーナ1名、スリランカ1名))が参加しました。ここにUPLB院生4名が加わり、GSID教員6名、UPLB教員4名、総勢34名の実施体制でした。

全18回の事前講義では、フィリピンに関する講義7回、方法論やフィールドワーク経験、危機管理などに関する講義8回のほか、調査計画の中間発表と最終発表を行いました。

現地調査では、初日にリサル市市長やUPLB教員による現地説明セミナーを実施した後、各グループに分かれて7日間のフィールドワークを行い、その結果を議論してまとめ上げ、最終日とその前日には現地政府とUPLB教員・学生の前で発表会を行いました。帰国後には当研究科にて報告会が行われ、2017年3月に報告書を刊行する運びとなりました。

2016年度は、リサル市長の全面的な支援のもと治安面・健康面でのサポートも得られたほか、リサル市の祭に参加できるなど、貴重な研修機会となりました。最後に、フィールド調査を受け入れてくださったリサル市市長を始めとする関係者の皆様、UPLBの参加者各位、GSIDの引率教員の皆様、また事前講義を担当された学内外の先生方、関係諸機関の方々にも心よりお礼を申し上げます。



▲現地調査初日の集合写真
市長と共に地方自治体政府前にて

▼現地調査における市長へのインタビュー風景



国内実地研修 2016

豊田市旭地区での国内実地研修

国内実地研修実施委員会 委員長 日下 渉

2016年度国内実地研修は、おいでん・さんそんセンターのご協力をいただき、豊田市旭地区を中心に実施しました。豊田市ではトヨタ本社を中心に産業が発達した一方で、全体面積の約7割を占める農山村では若者の流出が続き、人口減少、過疎・高齢化が進行してきました。豊田市における経済的に豊かな都市と農山村の格差は、日本の縮図ともいえます。そうしたなか、2000年に東海集中豪雨によって矢作川流域で水害が発生し、都市部が水没する危機に晒されました。その背景には、農村部で林業の衰退に伴う森林の荒廃が進んだ結果、矢作川の上流で豪雨による土砂崩れが多発したことがあります。

こうした都市と農山村が共有する課題を解決すべく、豊田市はおいでん・さんそんセンターを設立し、都市と農山村がそれぞれの良さを生かして互いに支え合う持続可能な地域づくりに取り組んできました。同センターは地域の住民、市民団体、企業、行政、専門家、大学の協働を推進し、農山村の空き家を都市からの移住希望者に紹介する空き家バンクの運営、農山村での生活を支えるスモール・ビジネスの研究実践、森林ボランティアのトレーニングといった活動を展開しています。これらは、経済成長のみを豊かさと思わず従来の開発に疑問を呈すと同時に、農山村の魅力を再発見

し、わくわくする暮らしを創造しようとする画期的な試みだと理解しました。本年度のDFWでは、こうした地域の取り組みを理解すべく、三つのグループが、(1)「スモール・ビジネスによる地域社会への貢献」、(2)「農山村地域における学習環境と住民の教育ニーズ」、(3)「森林管理におけるボランティアの役割」という研究課題に取り組みました。

この事業は、多くの方々からの暖かいご支援がなければ実施することができませんでした。鈴木辰吉センター長をはじめとするおいでん・さんそんセンター職員の皆様は、事前研修、予備調査、本調査、現地報告会まで、多大な時間を割いてご協力くださいました。住民の皆様は、本調査を快く受け入れてくださり、現地報告会では多くの知見を学生たちと交換してくださいました。この場を借りて、関係者各位に厚くお礼申し上げます。



▲森林ボランティアの方々へ話を聞く学生たち

2016年度 学位授与状況

2016年度に国際開発研究科(GSID)より授与された学位の取得者数は以下のとおりです。

後期課程博士学位取得者は25名です。取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)14名、国際協力専攻(DICOS)5名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)6名です。

前期課程修士学位取得者は73名です。取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)26名、国際協力専攻(DICOS)22名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)25名です。



▲博士学位取得者記念撮影(DID)



▲博士学位取得者記念撮影(DICOS)



▲博士学位取得者記念撮影(DICOM)



▲修士学位取得者記念撮影(DID)



▲修士学位取得者記念撮影(DICOS)



▲修士学位取得者記念撮影(DICOM)

入学状況

2017年度 4月 入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	26 ²⁷ 44	18 ¹⁶ 28	16 ¹⁵ 25
国際協力	24 ²² 48	17 ¹⁵ 33	13 ¹⁵ 28
合計	50 ⁴⁹ 92	35 ³¹ 61	29 ³⁰ 53

※注…赤は女性、青は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	6 ⁵ 9	3 ³ 6	3 ³ 6 ³
国際協力	5 ¹² 13	8 ⁹ 11	8 ⁸ 10 ⁷
合計	11 ¹⁷ 22	11 ¹² 17	11 ¹¹ 16 ¹⁰

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

2016年度 10月 入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	0 ² 2	0 ² 2	0 ² 2
合計	0 ² 2	0 ² 2	0 ² 2

※注…赤は女性、青は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	5 ⁹ 10	2 ⁵ 6	2 ⁵ 6 ⁰
国際協力	4 ⁸ 9	3 ³ 4	3 ³ 4 ⁰
国際コミュニケーション	1 ⁰ 1	0 ⁰ 0	0 ⁰ 0 ⁰
合計	10 ¹⁷ 20	5 ⁸ 10	5 ⁸ 10 ⁰

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

学位取得者のことば

国際開発専攻 博士(国際開発学) 王 嘉陽

私は経済・経営学を勉強するために来日しましたが、日本で生活しているうちに、日本と中国の環境の格差を痛感し、いつも心にもやもやと苛立ちのようなものを感じました。この思いが、私が日本で環境問題について勉強することを決意した原点です。博士論文の執筆中に、何度も研究の壁にぶつかり、方向性を失う場合もありましたが、自分の原点を思い出し、指導教員のご指導および家族・友人たちのサポートで、これら

の困難を乗り越えました。終始懇切丁寧にご指導くださった藤川清史先生、梅村哲夫先生、新海尚子先生、林宰司先生に心から感謝申し上げます。

GSIDでは、幅広く勉学するとともに、粘り強い研究精神と人々の「絆」の重要性も学びました。この経験を大切にして、中国及び世界の環境問題解決のための研究に身を捧げて、より良い社会の発展に尽力します。



DICOS Ph.D. (International Development) Patricia SAN MIGUEL

My experience in GSID was busy and tremendously rich. While conducting my studies, I worked and I also became a mother, which kept my time very tight. It was not easy, however I would like to signify that, like me, there is a wide range of students with diverse background and circumstances that enroll and success with their studies.

I was privileged to be inspired and motivated by professional researchers in different activities I was part of, like conferences, academic circles and associations, and undoubtedly the GSID seminar. GSID unique multicultural environment is also a rich source for learning and feeling comfortable. As a student, it is essential to look for your own opportunities that help you enhance your research and grow as a professional. Thus, keep your objectives clear, your determination and passion on, and enjoy the unique PhD experience as much as possible.



国際コミュニケーション専攻 修士(学術) 岡本 彩

修士課程はあっという間でしたが、私の人生の中で最も刺激的で達成感のあった2年間でした。私は教育関係の仕事に従事しながら、新しい時代を生きる子どもたちに何を伝えるべきかについてずっと答えが出せないままでした。GSIDで多彩な背景を持つ仲間と議論する中で、自分と異なる「他者」への寛容という一つのキーワードが見えてきました。これ

を元に、通常学級で学ぶ聴覚障害児への支援というテーマで論文を書き上げました。論文執筆の過程では行き詰まることもありましたが、指導教員のサヴェリエフ先生を始めとした諸先生方の温かい励ましのおかげで乗り越えることができました。今後も学んだことを胸に、挑戦を続けていきたいと考えています。



公開講座

「話し言葉コーパスの構築と分析」

教授 藤村 逸子

2016年9月24日に「話し言葉コーパスの構築と分析」というタイトルで公開講座を開いた。内容は、音声言語を収集し、コーパスを構築し、言語学的に処理する方法に関する説明を行い、話し言葉コーパスを分析したいくつかの事例を紹介するものであった。とりわけ、韻律が話し言葉によるコミュニケーションに果たす役割に焦点が当てられ、その分析の具体例が示された。対象言語は主にロマンス諸語(フランス語、イタリア語など)と日本語であったが、他の言語にも応用可能なものであった。講師は外国人研究員、外国人研究者としてGSIDに招聘中であったフィレンツェ大学(イタリア)のEmanuela Cresti教授とMassimo Moneglia准教授に加えて、パリ第7大学(フランス)のPhilippe Martin教授、専修大学の丸山武彦准教授を招き、話し言葉研究の世界的第一人者による豪華な講座となった。講義は日本語のテキスト付きで、英語で行われた。参加者は25名を数え、関東や近畿圏や、NTTやトヨタなどの企業からの参加もあった。



▲ポスター

人びとの「幸福」を目指した開発 — ブータンの事例を中心に —

准教授 上田 晶子

2016年度の公開講座では、「幸福」を究極の開発目標として掲げるブータンの事例に注目をし、同国の取り組みを紹介しながら、経済成長一辺倒ではない、より包括的な開発のあり方を考えるきっかけを作ることを目的にしました。全4回の公開講座は、国際開発専攻の教員だけでなく、ブータンの文化や歴史研究の世界的第一人者である、今枝由郎氏もお招きし、開催されました。毎回、20~40人の参加者があり、質疑応答も活発に行われ、関心の高さがうかがえました。人々の「幸福」を軸に開発を考え直すと、従来の開発と、どのような違いが生まれるのだろうか。そもそも、「幸福」を測ることは、可能なのかなど、思考を刺激されるトピックが多かったように思われます。「Think outside the box」というフレーズは、よく聞かれますが、開発の分野にも、このように従来型の思考にはまらない実践があるということを紹介できたことは、意義があったのではないかと思います。



▲公開講座の様子

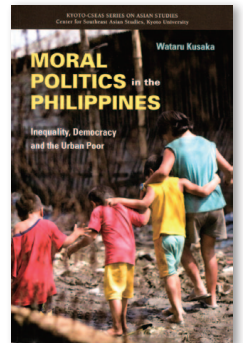
GSID教員の新刊紹介

『Moral Politics in the Philippines : Inequality, Democracy and the Urban Poor』

National University of Singapore Press and Kyoto University Press, (Feb 2017) 日下 渉 (著)

本書は『反市民の政治学——フィリピンの民主主義と道徳』(法政大学出版会 2013年)を英訳し、アキノ政権(2010-2016年)とドゥテルテ政権(2016年-)について加筆したものです。本書では、深刻な格差の境界線に沿って「正しさ」の名のもと社会を善悪に分ける道徳の言説が、異なる他者への否定につながり、民主主義の複数性を脅かしていると論じました。翻訳の校正中には、イギリスのEU脱退とアメリ

カ大統領選におけるトランプ勝利がありました。どちらも格差へのルサンチマンがもたらした現象で、社会を二分しました。本書の議論は、フィリピンだけでなく、現代政治の大きな潮流を理解するにも有効なようです。現在は、格差や道徳の分断を越える人びとの相互性に注目して、国家と市場から自律的でアナーキーな社会秩序の創出について研究しており、次の本にまとめたいです。



『フィリピンを知るための64章』

明石書店(2016年12月刊行)

大野拓司・鈴木伸隆・日下 渉 (編著)

本書は、「フィリピンってどんな国だろう」という新鮮な疑問を抱いた読者に、まず手にとってもらえる入門書として編みました。フィリピンはもはや新興国といっても過言ではないほどの経済成長を遂げた一方で、人びとの生を支え合う社会の強さも顕在です。21世紀フィリピンの魅力と可能性を紹介すべく、第一線で活躍する研究者、実践者、ジャーナリストが執筆陣に集いました。人びとの生活、歴史、社会と

文化、政治、経済、日比のつながりについて、64の章と10のコラムで分かりやすく解説しています。今日、ビジネスや英語留学でフィリピンに渡航する日本人の数が増えており、国内でもフィリピンにルーツを持つ若者も社会で活躍するようになってきました。日本とフィリピンが、同時代を生きる仲間としてより関係を深めていくために本書が貢献できれば幸いです。



『資源国家と民主主義 —ラテンアメリカの挑戦—』

名古屋大学出版会 (2016年9月刊行) 岡田 勇 (著)

2002年後半から2014年前半にかけて未曾有の高騰をみせた石油・天然ガス・鉱物資源価格は、世界でこれら資源を豊富に有する国々にどのような影響を与えたのだろうか。本書は、資源産出国であるラテンアメリカ地域を中心に、21世紀初頭の資源ブームが人々の政治参加行動にもたらした影響を明らかにする。資源を豊富に有する国で低成長や暴力が多く見

られるとする「資源の呪い」説や、望ましい国家制度によって悪影響は避けられるとする従来の説に対して、いかに資源の豊かさが人々の政治参加行動自体に影響を及ぼし、どのような抗議運動が生まれてきたかについて、ラテンアメリカ地域およびペルーとボリビアについての詳細なデータと方法をもとに明らかにしている。



『オーストラリア移民法解説』

日本評論社(2016年8月刊行) 浅川 晃広 (著)

本書は移民国家であるオーストラリアの移民政策の骨格をなす、移民法を詳細に解説したものである。

この移民法の目的として「国益において、外国人のオーストラリアへの入国、在留を規制することである」(第4条)と規定され、明確に「国益としての移民政策」が打ち出されている。近年では1年間に約20万人を永住者として受け入れており、さらに、その約6割が英語能力を有する「技術移民」となっている。

また移民法の特徴として、条文が膨大、改正の頻度が高い、裁判所が政府に不利な司法判断をすることが多いことが指摘できる。さらにほとんどのビザは法律本体ではなく、下位規則で制定されているため、迅速かつ機動的な政策運営を可能としている。

本書が今後の日本における外国人政策を検討する際の、重要な資料の一つとなることを願ってやまない。



『難民問題を考える視点 一少ない認定者数の真実一』

イミケン書房(2016年7月刊行) 浅川 晃広 (著)

この本は、日本の難民認定制度について解説し、その上で、難民問題に対する日本の役割を、現代の世界情勢から考えるものです。また、筆者が2013年3月から法務省入国管理局・難民審査参与員として、約300件(本紹介執筆時点)の案件を取り扱ってきた経験も記しています。

まず、我々が日常の用語として考える「難民」と、日本の難民認定制度上の「難民」とは、その定義が大き

く違います。後者の「難民」は国際条約の一つである難民条約上の定義で、日常用語よりもはるかに狭い定義になっているので、大いに注意が必要です。

そして、筆者も含めた、外部の専門家である難民審査参与員を活用した再審査制度があり、入国管理局の決定のほとんどが追認されています。このため、申請者数に比して、認定者数が少ないのは、筆者としては妥当であると考えています。



新スタッフ紹介

情報・出版担当 助教 王 彧

2017年4月1日より情報および出版担当の助教として着任いたしました。コンピュータやネットワークの管理、紀要やニューズレター等の出版業務を担当させていただきます。研究の専門は知能情報処理です。機械学習のアプローチを用いて、画像・映像の認識に関する研究を行っています。

着任してからの月日がまだ浅いため、今は研究科内のコンピュータ・ネットワーク環境や様々な仕事の

進め方および業務内容等を把握するのに苦戦しております。早く仕事の全体像を把握して、皆様のお役に立てるように努力しております。また、これまでに身につけた情報関連の知識を、GSIDのコンピュータ・ネットワーク環境をより便利なものにしていきたいと思っております。至らぬ点があるかもしれませんが、精一杯努力しますので、どうぞよろしくお願ひ致します。



客員研究員の紹介

国内客員研究員

H28 内海 成治(京都女子大学発達教育学部・教授)

研究課題:紛争後の教育復興の課題
期 間:平成28年10月～平成28年12月

川口 純(筑波大学人間系教育研究科・助教)

研究課題:マラウイの教員養成政策
期 間:平成29年1月～平成29年3月

中澤 香世(早稲田大学国際戦略研究所・招聘研究員)

研究課題:差異法と内戦の原因:モザンビークとアンゴラの比較
期 間:平成28年11月～平成29年1月

岡野 英之(立命館大学衣笠総合研究機構・専門研究員)

研究課題:アフリカの紛争及び紛争後の社会変化に関する研究
—シエラレオネ・リベリアを中心に—
期 間:平成28年12月～平成29年1月

薬師寺公夫(立命館大学大学院法務研究科・特任教授)

研究課題:個人の権利(人権)の承認が国家の責任及び
国際請求権に与える法的効果
期 間:平成29年2月～平成29年3月

H29 西川 芳昭(龍谷大学経済学研究科・教授)

研究課題:食と農のつながりを考える農村開発
期 間:平成29年4月～平成29年6月

小林 知(京都大学東南アジア地域研究研究所・准教授)

研究課題:カンボジアにおける仏教と開発の関係
期 間:平成29年4月～平成29年7月



外国人客員研究員

H28 Anna De Luca (ルイージ・ボッコーニ商業大学・特任教授)

研究課題:投資協定が直面する問題点及び課題の研究
期 間:平成28年12月13日～平成29年2月10日

H29 Keng Chansopheak (王立ブノンペン大学・研究員)

研究課題:教育分野における官民連携:カンボジアの例
期 間:平成29年4月1日～平成29年7月7日

Farkhanda Shamim

(パーレーン大学経営管理学部経済・金融学科・助教授)
研究課題:開発途上国の中小企業(SME)振興における参加型金融
ーイスラム金融における官民協力ー
期 間:平成29年7月4日～平成29年8月31日

Joe Devine (バース大学・上級講師/学科長)

研究課題:ウェルビーイング・不平等・貧困
期 間:平成29年7月17日～平成29年9月8日

Christian von Lübke (フライブルク大学ABI・上級研究員)

研究課題:アジアにおける開発の政治学
期 間:平成29年9月11日～平成29年10月6日

Steffen Hindelang (ベルリン自由大学・准教授)

研究課題:日欧の自由貿易協定におけるSMEの取り扱いについて
期 間:平成30年1月10日～平成30年3月30日

スタッフの人事異動 (平成28年6月～平成29年5月)

教員

- 平成29年4月1日 転出 助教 浦田 真由 (情報学研究科へ)
- 平成29年4月1日 転入 助教 王 彧 (情報科学研究科から)
- 平成29年4月1日 人文学研究科へ配置換(当研究科での教育業務は継続)
櫻井 龍彦、内田 綾子、サヴェリエフ イゴリ、大名 力、大島 義和、
井土 慎二、木下 徹、杉浦 正利、山下 淳子、笠井 直美、
西村 秀人、坂部 晶子、成田 克史、藤村 逸子、加藤 高志
- 平成29年4月1日 アジア共創教育研究機構へ配置換(当研究科での教育業務は継続)
藤川 清史、山田 肖子

事務

- 平成29年4月1日 転出
総務G 二村 希 (文系総務課総務G(経済担当)へ)
- 平成29年4月1日 着任
総務G 伊藤 哲

協力教員の交代

比較国際法政システム講座
旧:三浦 聡 (大学院法学研究科)
新:松尾 陽 (同上)

出版物紹介

2016年度には、『国際開発研究フォーラム』47号が発行されました。
次号48号は2017年度内の発行を予定しております。

『国際開発研究フォーラム』掲載論文は、下記URLアドレスより全文閲覧できます(21号以降)。
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/index.html>

名古屋大学大学院国際開発研究科 広報委員会

Information
お知らせ

オープンキャンパス 2017 に関するお知らせ

下記の要領で「オープンキャンパス2017」を開催します。皆様のご来場をお待ちしております。

- 日時** 平成29年7月8日(土) **会場** 名古屋大学大学院 国際開発研究科棟 (地下鉄名城線「名古屋大学」下車)
(事前予約不要) 地図はホームページを参照ください。
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/general/map.html>

内容 プログラム

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) 留学生相談 11:00～14:00 (2) 施設見学 <ul style="list-style-type: none"> ●図書室 11:00～13:00、14:00～16:00 ●言語情報処理室(コンピュータールーム) 11:00～12:00、13:00～14:00 (3) 導入部 研究科紹介ビデオ上映 13:00～13:15 (4) 院生によるGSID紹介 13:15～13:50
院生による特色ある社会貢献活動、インターンシップ体験談を含む | <ul style="list-style-type: none"> (5) 全体説明会 14:00～14:45 <ul style="list-style-type: none"> ●専攻及び教育プログラムの特徴 ●GSIDの入学生の構成、就職先 ●入学試験の説明 ●公開講座の案内 ●リーディング大学院等の案内 など (6) 専攻別説明会と個別相談 15:00～16:00 <ul style="list-style-type: none"> ●各専攻別説明会(教育プログラムを中心に) ●個別相談(教員と院生が対応) (7) 展示 11:00～16:00
海外実地研修、国内実地研修、研究科出版物 など |
|---|---|

お問い合わせ先 / opencampus@gsid.nagoya-u.ac.jp